

国際芸術祭「あいち2022」を終えて……………1
令和4年度 博物館アルバム……………2～7
新収蔵資料紹介 尾張の文人画……………8・9
新収蔵資料紹介 織物工場資料……………10・11
令和5年度 展覧会・催し物のご案内……………12



国際芸術祭「あいち2022」展示風景/遠藤薫《羊と眠る》2021-2022  
© 国際芸術祭「あいち」組織委員会  
撮影：ToLoLo studio

## 国際芸術祭「あいち2022」を終えて

3年に一度、愛知県で開催される国内最大規模の現代アートの祭典・国際芸術祭「あいち2022」が7月30日(土)から10月10日(月・祝)の73日間、「STILL ALIVE」今、を生き抜くアートのちから」をテーマに本市を会場の一つとして開催されました。総勢100組にも及ぶアーティストが参加し、本市ではオリナス一宮の奈良美智さんをはじめ、のこぎり二の塩田千春さん、旧スケート場のアンネ・イムホフさんなど、名だたるアーティスト19組の作品が10ヶ所で展開され、当初はコロナ禍での開催に不安があったものの、始まってみれば会場周辺は多くの人でにぎわい、一宮市会場は過去の他市会場と比較して最も多い13万人以上の来場者を記録しました。

今回の芸術祭では博物館が管理する豊島記念資料館も会場となり、遠藤薫さんの《羊と眠る》(2021-2022)が展示されました(写真)。特に2階のフロアでは、アーティストが自身で織った羊毛の落下傘が吊られ、一宮市会場の見どころの一つとして注目されました。こうした注目により、常時開館していない豊島記念資料館が広く知られるきっかけとなったことも大きな成果であったと思います。

博物館でも芸術祭に関していくつか取り組みを行いました。芸術祭開幕前には、市役所本庁舎で展示を行った眞田岳彦さんによるワークショップ「あいちN.A.U.(なま)プロジェクト」が開催され、アーティストと市民の交流が行われました。展示する作品の一部を参加者が制作し、刺激的な体験になったと思います。他にも、会期にあわせて芸術祭の連携企画事業「国登録文化財 葛利毛織工業工場のこぎり屋根」を開催しました(2頁参照)。芸術祭の連携事業ということと、服地生産の世界で注目を集める葛利毛織工業というネームバリューの影響もあり、20〜40代といった通常期とは異なる世代の来館が多く見受けられました。

芸術祭は終わりましたが、今回の芸術祭がもたらした芸術への機運を一過性のものとすることなく、一宮市の文化が一層花開ききっかけとなることを願います。

(国際芸術祭担当 村松達樹)



**所蔵品による企画展「川合玉堂とゆかりの画家たち」**  
令和4年6月4日(土)～6月26日(日)

玉堂記念木曾川図書館で収蔵・展示していた川合玉堂作品を博物館へ移動した後、毎年春に開催している川合玉堂展の3回目です。今回は、玉堂作品19点に加えて、玉堂ゆかりの画家の作品として、幸野棟嶺《紫宸殿》(令和3年度寄贈)、喜多村麦子《丘に咲く桜》(令和元年度寄贈)、佐々木尚文《朝顔》《遠山之雪》を展示しました。また、八剣神社所蔵の玉堂の書簡4点(市指定文化財)、雄山瑞倫宛書簡、山田又市宛書簡(令和2年度寄贈)も紹介しました。

会期中には、展示解説2回(のべ31名)、オンライン鑑賞講座1回(2名)を実施し、20日間の会期中、653人の方にご来館いただきました。

(学芸員 成河端子)



展示室西側



展示室東側



展示解説



展示室北側

**企画展**

**「国登録文化財**

**葛利毛織工業工場とのこぎり屋根」**

令和4年7月16日(土)～8月14日(日)

本展は、一宮市木曾川町玉ノ井に所在する葛利毛織工業株式会社の鋸屋根工場である工場等建物群が、令和2年度に国の登録有形文化財に登録されたことを記念して開催しました。

建物上部の外形が鋸歯に似た鋸屋根工場は、市域では大正前期に建築が確認され、昭和後期に至るまで様々な規模の工場が大量に建てられました。建物の用途は、かつては市域の事業所の大半が繊維産業だったことから、ほとんどが織布などの繊維関係の工場だったとみられます。

本展では、市内三条にあった鈴鎌織物工場を始め、大正期を中心とした鋸屋根工場について図面や文書、写真パネル等で紹介しました。また葛利毛織工業株式会社からお借りした製織や製織準備に使用する道具、生地等を写真パネルとともに展示し、現役の織布工場の生産工程を紹介しました。なお関連行事として、同社工場の現地見学会を実施しました。

本展の展示構成は以下のとおりです。

- 写真家・林秀樹の「ノコギリノコドウ」
- ・2連の鋸屋根工場群
- ・工場で働く人たちのポートレイト
- 鋸屋根工場の世界
- 市域の鋸屋根工場―大正期を中心に―
- ・鈴鎌織物工場
- ―力織機の導入と鋸屋根工場の建築―
- ・吉田織産合資会社工場―煉瓦造の鋸屋根工場―
- ・広がる鋸屋根工場
- ・舩善合名会社工場
- ―近年まで現存した大正期の鋸屋根工場―

- 葛利毛織工業株式会社工場
- ―国登録文化財の建物群と服地生産―
- ・葛利毛織工業の沿革
- ・葛利毛織工業の建物群
- ・葛利毛織工業の服地生産
- 設計、たて糸の準備①…ワインダーと巻き返し、同②…整経機と整経、同③…経通し、よこ糸の準備…管巻機と管巻き、織機と製織、検反機と検反、生地・製品

(学芸員 岩井章真)



葛利毛織工業の服地生産の紹介



特別展示室



写真家・林秀樹の「ノコギリノコドウ」



市域の鋸屋根工場  
鈴鎌織物工場：力織機の導入と鋸屋根工場の建築

**夏季イベント「博物館で夏祭り！秋祭り！」**  
令和4年7月16日(土)～10月10日(月・祝)

毎年恒例となった小・中学校の夏休み期間中に開催する催し物で、今年度は国際芸術祭の会期にあわせて期間を10月まで延長し「博物館で夏祭り！秋祭り！」と称して開催しました。

期間中は、楽しみながら学べる「博物館クイズラリー」、展示している資料の一部分をズームした難易度別の「ズームクイズ」、クイズを解きながらマップを完成させる「博物館マップ」のほか、企画展「国登録文化財 葛利毛織工業工場とのこぎり屋根」に関連したワークシートも配布しました。これらのワークシートは来館する子どもたちに大変好評で、今後も様々なワークシートを考えていきたいと思えます。また今年度も常設展示室内などにワークシートに関連した子ども向けのキャプションを作成し、配置しました。

さらに、今年度は開催期間が例年より長いこともあり、期間中には、絵本作家・亀山永子さんによる絵本『きせきのやしのみ』の読み聞かせをはじめとした様々なイベントも開催しました。尾州の糸と布を使った「糸と布を使って糸かけアートに挑戦！」では、だれでも簡単に糸をかけられるようにと考えた歯車型をした紙に糸をかけた後、布を使って思い思いに飾り付けをし、参加した子どもたちは素敵な作品を作り上げました。他にも、紙に描かれた絵が動く装置を作る「手回しアニメーションをつくらう」では、完成すると「絵が動いたのが大変印象的でした。また一宮市のことを学べる「一宮かるた」を用いた「かるた大会」では、かるたの絵札を取るだけでなく、そこに描かれた偉人や物についても皆で話し合い、遊びながらより深く一宮市のことについて知ってもらえるイベントになったのではないかと思います。現代美術作家・長谷川厚一郎さんによる「DJBはせがわ」と「迷路でおぼけ屋敷」では、たくさんの使用済みのダンボールを使用

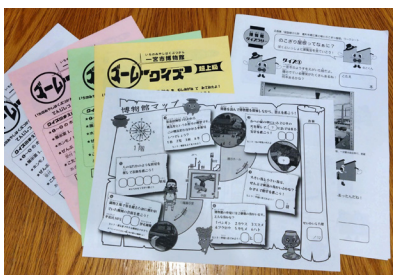
して講座室いっぱい大きな迷路を作り、完成後はお化け屋敷にして遊びました。

今年度開催したどのイベントも参加した子どもたちが笑顔で「楽しかった！」「いろんなことがわかった」というような声を聞くことができました。

また、博物館・三岸節子記念美術館・尾西歴史民俗資料館を巡ってスタンプを集める「いちのみやミュージアムズ 3館destampラリー」も開催し、こちらも多くの子どもたちが参加しました。

今後も楽しみながら、より興味を持って学んでもらえる取り組みを充実させていきたいと思えます。

(学芸員 吉川ひとみ)



ワークシート



手回しアニメーションをつくらう



絵本『きせきのやしのみ』読み聞かせ



「DJBはせがわ」と「迷路でおぼけ屋敷」

**特別展「西田眞人」の宮を描く**  
令和4年10月15日(土)～11月27日(日)

神戸市在住の日本画家 西田眞人氏(にただまさと、1952～)、日展特別会員)が日本全国の一の宮をテーマに描いた作品を紹介する展覧会を、作品を所蔵する財団法人敬愛まちづくり財団と企画を担当する神戸新聞社の協力で開催しました。

「一の宮」とは神社の格を表し、国司が新たに任じられた際に最初に参拝する神社でした。平安から鎌倉時代にかけて成立したといわれています。西田氏は、これまでイギリスなど海外をたびたび訪れて诗情豊かな風景画を多数描いてきましたが、近年は、日本全国を旅して「一の宮」を描いています。最終的に全国の一の宮と伊勢神宮の内宮・外宮あわせて合計103社を描くことを目指しており、これまで60点程が完成しています。

本展では屏風を含む日本画31点と写生画34点に加え、西田氏より借用した日本画の道具と御朱印帖も展示しました。全て一の宮に取材した作品でありながら日本画に描かれたモチーフは様々で、神社の本殿や鳥居のほか、周辺の豊かな自然や四季の移り変わりも描き込まれ、多彩な作品が並びました。

展示室に続くギャラリーには、尾張国の一の宮で出品作品に描かれている真清田神社と大神神社をそれぞれ紹介するパネルや、全国の一の宮を掲出した地図を展示するとともに、西田氏の画業を紹介するビデオ(公益財団法人兵庫県芸術文化協会作成)を放映しました。10月30日(日)には妙興寺公民館にて「一の宮」を描く旅」と題して西田氏の講演会を開催し、旅先で撮影した写真を紹介しながらこれまでの制作についてお話しいただきました。講演終了後に図録サイン会を実施し、参加者の方はサインを書いていただくとともに制作について質問をしたり作品の感想をお伝えするなど、現代作家の展覧会ならではの催しとなりました。また11月3日(木・祝)と11月13日(日)には、「学





西田真人氏と「七夕」(10月14日内覧会)



第1展示室(特別展示室)

芸員によるスライドトーク」と題して、常設展示室の映像コーナーにて出品作品の画像をご覧いただきながら解説をしました。  
独自の視点で描かれた全国の様々な一の宮の作品をご覧いただくことで、一宮市の名前のゆかりや神社にまつわる歴史、文化について改めて興味をもっていただけではないかと思えます。

(学芸員 杉山章子)



10月30日 講演会



第2展示室(講座室)



書



開会式テープカット

一宮市内を会場のひとつとして、国際芸術祭「あいち2022」が開催されたことを契機に、展覧会の名称を「一宮市現代作家美術秀選展」から一新しました。通算して22回目を迎える今回は、一宮市美術展市長賞受賞者11名、一宮美術作家協会・一宮書道協会・一宮写真協会推薦者61名の方にご出品いただきました。展覧会初日には3年ぶりに開会式を挙行し、34名の来賓の方にご出席賜りました。14日間の会期中には975名の方にご来館いただき、美術作品の精華をご覧いただくことができました。  
書の展示では、例年ケース内展示としていた西側の壁面展示とし、作品を間近でご鑑賞いただけるようにしました。

(学芸員 成河端子)



写真・彫刻・立体



市長賞受賞作品

**企画展「いちのみやアートアニュアル2022」**  
令和4年12月3日(土)～12月18日(日)

**企画展「くらしの道具 これなくんだ？」**  
令和5年1月14日(土)～2月19日(日)

小学校3年生の社会科の学習に合わせて開催している企画展「くらしの道具」も32回目となり、今年度も市内小学校42校に対し、昨年度と同様に事前に学校側にオンライン見学か、来館見学かを選択してもらいました。オンライン見学は、ビデオ会議システムを利用し実施しました。

オンライン見学は、昨年度同様に各学校の希望日ごとに午前・午後で振り分けて実施しました。当日は展示室内に展示してある道具や展示解説書『たんけんブック』を元に、使い方や人と対比した道具の大きさなどが映像を通してでも子どもたちが理解できるように解説しました。また、昨年度実施した後に、学校側からのアンケートの意見で出ていた要望やエコーなどの問題点は、マイクの導入やミュートをうまく活用したり、道具の名前や重さなど覚えてほしいと思う重要な部分では、文字カードを映像に映しながら説明したりと工夫しました。30分間の質疑応答では、当日紹介した道具以外の質問も子どもたちから多く出ました。中には、「昔のくらしと今のくらしどちらが優れているか」というような質問もありました。また、映像越しではわからない道具の重さや、実際にその道具を使った時の質問などは、自分自身でも昔の道具を使った体験を事前に行い、その体験を交えながら、少しでも子どもたちに道具について深く学んでもらえるように、答えるようにしました。

また、今年度の来館見学は見学希望の市内小学校と市外からの1校含め、8校ありました。館内を一緒に周りながら、常設展示室内では一宮市の歴史や博物館について、「くらしの道具展」内では道具の工夫や仕組みを説明しました。また、子どもたちが事前に考えてきている質問や、その場で疑問や不思議に思った質問などにも答えました。どの子も、『たんけんブック』やメモ用紙に時間の限り、たくさん書き込んで、道具



オンライン見学



つまみ細工でストラップを作ろう

や博物館のことをしつかり学んでもらうことができたのではないかと思います。

毎年テーマを変えながら開催する「くらしの道具展」は、今年度のテーマを「これなくんだ？」と題し、現在の私たちの生活ではあまり目にするものがなくなつた生活道具の中から、「珍しいモノ」や「ちよつと見ただけでは用途がわからない道具」を紹介しました。来館された親子連れや年配の方々などは、染付古便器や蘭引、手回し洗濯機などの道具を見ながら驚いたり、実際に使っていた思い出話などをされている光景を見かけることができました。

実際の照明道具を使った「昔のくらしを知ろう」照明道具の移り変わり」と日本の伝統工芸を知る「つまみ細工でストラップを作ろう」の関連イベントでは、どちらも多く申込みがあり、いずれも抽選となりました。当日のイベントでは、参加者の子だけでなく、保護者の方にも昔のくらしや道具について興味を持ってもらえる機会になったと思います。これからも、より興味を持ってもらえる様に工夫を凝らした展示や体験イベントをしていきたいと思ひます。

(学芸員 吉川ひとみ)

企画展

「没後50年

郷土史家 森徳一郎

「没後50年 郷土史家 森徳一郎 浅野研究から一宮市史へ」

令和5年2月25日(土)～3月26日(日)

一宮地域の郷土史研究の先駆者・森徳一郎の没後50年を記念して、その業績を振り返るとともに、郷土史研究の意義、郷土の豊かな文化の土壌を伝える展覧会を開催しました。

森徳一郎(1885～1972)は、丹羽郡浅野村(現在の一宮市浅野)の味噌醬油醸造の家に双子の長男として生まれました。徳一郎は小学時代から歴史が好きでしたが、叔父・為五郎や父・徳太郎の影響もあり俳句を作るようになりました。しかし、26・27歳頃に俳句への熱が冷めてしまい、ちようどその頃、丹羽郡誌編纂のための史資料蒐集に携わり、「郷土史家 森徳一郎」としての道を歩み始めました。

大正初年より浅野に関する史料蒐集に没頭し、その浅野研究は大正6年(1917)の浅野公園開園及びその記念誌『浅野荘と浅野氏』に結実します。これを契機に郷土史家としての道を歩み始め、後にキリシタン研究、尾張地域史研究へと対象を広げていきます。

大正10年(1921)の一宮市市制施行に伴い、一宮市史編纂事業に携わっていきます。その成果は現在の一宮市の歴史の基礎となりました。また一宮市史編纂事業の中で、愛知県史蹟名勝天然紀年物調査会臨時委員、愛知県史編纂事業にも携わり、ますます史資料の蒐集に力を入れるようになりました。

本展覧会では、一宮市立中央図書館に保管されている一宮市史編纂資料をはじめ、関連する考古遺物や自筆のスケッチなどを森徳一郎の事績とともに紹介しました。

また博物館講座「尾張平野を語る26 地域史研究を語る」では、企画展に合わせ、郷土や地域の歴史を調べる方法やその研究の楽しさについてご講演いただきました。第1回の講師には、新編一宮市史編纂事業・

愛知県史編纂事業にも携わった方、第2回には森徳一郎の下で郷土史研究への道を歩んだ方、第3回には晩年の森徳一郎の下で写真撮影などに携わった方をお迎えしました。

①3月4日(土)「近世後期、騒ぎ立つ尾張野の村々——中島郡荻安賀村の「村方騒動」を中心として——」  
講師：元一宮市文化財保護審議会委員 小川一朗氏  
②3月11日(土)

「森徳一郎さんと一宮史談会のことなど」  
講師：愛知東邦大学地域創造研究所顧問 森靖雄氏  
③3月18日(土)「森徳一郎さんを偲ぶ」  
講師：円空学会顧問 長谷川 公茂氏

(学芸員 石黒智教)





## 特集展示コーナー

2階の常設展示室の一面を「特集展示コーナー」とし、博物館に所蔵あるいは寄託されている美術工芸品等を様々なテーマで紹介しました。

### ●「尾張の洋画 生誕120年 宮脇晴」

4月12日(火)～7月3日(日)

名古屋出身の宮脇晴(1902～1985)は、療養のため転居した現在の知多市で画家の大澤鉦一郎と出会い画家を志しました。初期の写実的な静物画のほか家族や身近なものを温かな眼差しで描いた作品を展示しました。また大澤の油彩画や妻でアプリケ作家の宮脇綾の作品も紹介しました。

### ●「土鈴いろいろ」

7月5日(火)～10月10日(月・祝)

平成3年度に石原照子さんより寄贈された土鈴347点の中から、動物、神仏・妖怪、人形、風物の4つのテーマ別に紹介し、関連資料として真清田神社の土鈴が描かれた名取春仙《一宮名勝図絵》の袋(額装)を展示しました。

### ●「名僧の墨蹟」

10月15日(土)～12月18日(日)

平成26年度に佐藤金吾さんより寄贈された墨蹟等318点の中から、近代に活躍した一宮市出身の禅僧や妙興寺の歴代住持の経歴を紹介するとともに、その作品12点を展示しました。

### ●「生誕100年 郷土の俳人 小川双々子」

12月20日(火)～令和5年2月12日(日)

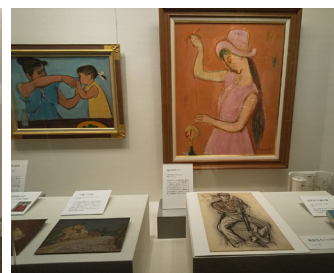
一宮市で活動した現代を代表する俳人・小川双々子(1922～2006)の世界を、句集や自筆原稿のほか、油彩画や俳句の記された陶芸作品などの美術作品により紹介しました。

### ●「墨コレクション 洋装いろいろ」

2月14日(火)～4月9日(日)

毛織物製品のコレクションの中から、貴族が着用した華麗な大礼服や、三島由紀夫が結成した楯の会の制

服など近代の貴重な洋装を展示しました。



尾張の洋画 生誕120年 宮脇晴



名僧の墨蹟



土鈴いろいろ



生誕100年 郷土の俳人 小川双々子

## たいけんの森

毎週土曜・日曜・祝日(夏休み期間中は毎日)に開催している体験コーナーです。

4月から5月は市制100年を記念し、一宮市と自分の歴史を書き込むオリジナルのすごろくを作る「一宮市と私の100年すごろく」を開催しました。

6月から7月は、「紙の銅鑼づくり」と題し、常設展示で展示している銅鑼の書き起し図をもとにした実物サイズの立体クラフトを作りました。

8月から9月は、「つなげてドキドキ絵本」と題し、点をつなげると博物館に展示してある様々な資料が表れる絵本を作りました。

10月から11月は、特別展「西田真人 一の宮を描く」の出品作品の図版を貼り付けて作る「小さな絵の展覧会」を開催しました。

12月から1月は、うさぎ年にちなんで、綿で作った

うさぎを紙の絵馬に貼り付ける「ふわふわうさぎの絵馬」を作りました。

2月から3月は、ギザギザに折った紙を広げると展示資料の図版が現れる「ふしぎなギザギザ絵」を作りました。

尾張もめん伝承会のボランティアによる週末の「はたおり・糸つむぎ」体験は、新型コロナウイルスの感染状況を見ながら実施しました。



小さな絵の展覧会

## キッズクラブ

継続会員に新規会員を随時加えて全13名の会員に毎回メールにて案内を送り、実施しました。

初回の5月29日(日)は、絹谷幸二の壁画を見学して一宮市に関するモチーフを探しました。その後館内各所の彫刻のほか妙興寺仏殿の天井画や仏堂を見学しました。6月19日(日)は、ワークシートを用いて企画展「川合玉堂とゆかりの画家たち」を見学しました。

7月18日(月・祝)は、常設展示室に展示されている八王子遺跡出土の銅鑼を観察して当時の使われ方などを想像し、たいけんの森で紙の銅鑼を作りました。8月14日(日)は企画展「国登録文化財 葛利毛織工業工場とのごぎり屋根」を見学し、のごぎり屋根工場の立体クラフトを作りました。1月28日(土)は、企画展「くらしの道具 これなくんだ？」を見学した後、

実際の道具を触って観察し、使い方や昔の人の工夫を学びました。3月19日(日)は、ワークシートを用いて特集展示「墨コレクション 洋装いろいろ」を見学しました。年間を通じて様々な展示や資料に親しみま

した。



紙の銅鑼づくり

## 古文書講座 「古文書にしたいしむ」

今年度も昨年度に引き続き中島郡荻安賀村（現、一宮市大和町荻安賀）の豪商関戸家の史料（館蔵）より、文政10年（1827）・安政6年（1859）「御鍛祭記録」と寛延4年（1751）〜宝暦9年（1759）の荻安賀村の庄屋記録「井上弥五左衛門庄屋記録」を読み進めました。

今回とも博物館に隣接した妙興寺公民館2階大会議室を会場とし、常時換気等コロナ対策を実施しながら、令和5年2月11日（土）に全10回を終えることができ、7名の修了者を送ることができました。令和5年度も引き続き開講します。



## 博物館実習

8月2日（火）から8月6日（土）までの5日間、愛知県立大学2名、愛知大学1名、名古屋芸術大学1名、三重大学2名の全6名（定員6名）の学生が、学芸員資格の取得に必要な実習を行いました。

最初は館内の設備や主な活動、組織などについてレクチャーを受け、その後、民俗資料の整理、掛け軸や古文書の取り扱い、絵画や解説パネルの壁面への展示などの実習を行いました。また期間中、常設展示を楽しんでもらうための子供向けワークシートを各自作成することを課題とし、実習の合間の時間帯に準備してもらいました。最終日



に発表してもらいましたが、いずれも工夫の感じられる内容でした。展示物について来館者にいかに伝えるか考える良い機会になったと思います。

## 市民文化財めぐり

文化財は、私たちの過去の歴史や遠い祖先の生活を身近なものとして感じさせてくれる貴重な文化遺産です。一宮市では昭和42年以来、市民の方に文化財をご覧いただく市民文化財めぐりを実施しています。今年度は、11月10日（木）に15名の参加者が約1.6キロメートルのコースを歩き、文化財保護審議会委員や学芸員の解説を聞きながら巡りました。見学コースは次の通りです。

葛利毛織工業／工場等（国登録・建造物）↓念敬寺／墨字吉銅像 ↓賀茂神社／参集所（旧丹葉織物同業組合玉ノ井検査所）・古鏡（市指定・工芸）・古神門（市指定・建造物）・玉ノ井清水（市指定・史跡）↓釈迦寺／木造千手観音立像等（市指定・彫刻）↓エキノコ玉ノ井



## 文化財防火デー関連行事

昭和24年1月26日に法隆寺金堂壁画が焼損したことから、この日は「文化財防火デー」に定められています。博物館では毎年、文化財防火デーの関連行事として、消防本部とともに文化財防火訓練と文化財防火パトロールを実施しています。

文化財防火訓練は、1月26日（木）に堤治神社境内において実施する予定でしたが、当日の朝、市内で火災が発生したため急遽中止となりました。同日の文化

財管理者研修会は、小信中島公民館（墨会館）にて予定よりやや時間を早めて実施し、消防本部や一宮警察署の方から防火・防犯についてお話しいただきました。

文化財防火パトロールは2月15日（水）に実施し、市指定文化財が所在する4カ所（貴船神明社、宝光寺、北方代官所跡、里小牧区）で管理状況の確認をするとともに、防火指導や防火用設備等の点検指導を実施しました。



文化財防火パトロール

## 民俗芸能公演

伝統芸能の保存継承に貢献するため、現在でも市内で活動を続け継承されている無形文化財・無形民俗文化財の保存団体による公演を行うものです。本年度は2月4日（土）に妙興寺公民館にて、ともに市指定・無形文化財である宮後住吉踊と島文楽の公演を行いました。宮後住吉踊保存会が「豊年」「深川」「かっぱれ」「すがわき」「おんど」を、島文楽保存会が「三番叟」「壺坂靈験記」を公演し、4年ぶりの開催という事もあり、80名もの方にご参加いただきました。





## 新収蔵資料紹介 尾張の文人画

令和3年度に江戸時代の絵画等16点が寄贈されました。これらは江戸時代中期から繊維を商った一宮市の森林商店（現在のモリリン株式会社）の森林兵衛（1855～1946）および森清次（林兵衛の娘婿、1883～1939）が収集した絵画で、おもに尾張の文人画家による作品です。



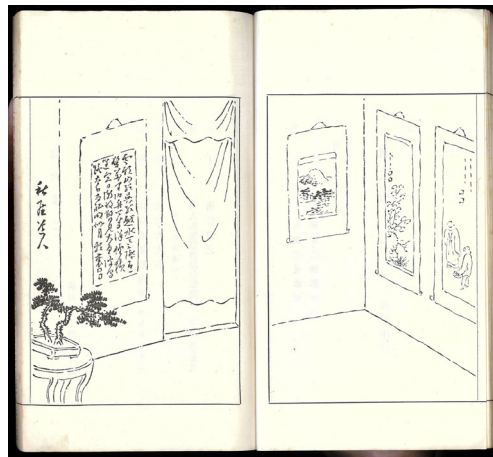
森 清次

森 林兵衛

ともに『森林のあゆみ』(1969)より

事業のかたわら二人は茶道をたしなんでいました。とくに林兵衛は煎茶の大規模なお茶会を催し、その様子は『学温園茶会図録』（昭和元年、林兵衛の兄林右衛門の17回忌の茶会）や『竹翁金婚祝賀会図録』（昭和5年、竹翁は林兵衛の号）に記録されています。図録によると今回寄贈の絵画を展示していたことが分かります。このほか森家には煎茶道具や文人趣味（中国風）の置物なども伝わります。今日では茶道といえは千利休を祖とする抹茶の茶道が主流ですが、幕末から昭和初期には煎茶や中国の文化を貴ぶ文人趣味が流行し、実業家の間では煎茶の茶会がたびたび催されていました。林兵衛もその一人で、森家に伝わる絵画や工芸品は、茶会の席で用いることを一つの目的として収集されたものと思われまます。

令和5年秋の企画展「尾張の文人画 森コレクションを中心」では、新たに寄贈された絵画を中心に関連する所蔵品を加えて尾張の文人画を紹介します。また林兵衛の茶会についても紹介し、繊維産業で発展した地域の豊かな文化の一面をご覧いただけます。本稿では新たに所蔵になった絵画の中から、茶席で使用されたと思われる作品や林兵衛、清次の茶人としての趣味が感じられる作品を紹介します。



①『竹翁金婚祝賀会図録』（個人蔵）より第四席展観



② 山本梅逸 「木芙蓉小禽図」 絹本着色  
131.8×57.0cm

②は、『竹翁金婚祝賀会図録』第四席（図①）に展観幅として4点ある内の「梅逸設色芙蓉白頭翁」であると思われる作品です。作者の山本梅逸（1783～



③山本梅逸「水墨花卉長巻（一部）」天保6年（1835）、紙本墨画、20.9×660.0cm

作品③も、花鳥画を得意とした梅逸の見事な筆さばきと写実力が感じられる作品です。墨一色で描き分けられた多種多様な花々が、6・6mもある画面を埋め尽くしています。

1857）は名古屋に生まれ、浮世絵の山本蘭亭、四条派の張月樵に手ほどきを受け、その後、豪商の神谷天遊の所に身を寄せて古画を模写したといわれています。二十歳で京都に出て各地を巡ったのち、写生を基にした花鳥画を得意とし、気品と艶のある画風が人気を得るようになります。晩年には尾張藩御用絵師となつて名古屋に戻りました。作品の右下に見える鳥が白頭翁で、頭が白いことから長寿を表します。また芙蓉は「蓉（よう）」と「榮（よう）」が同音であることから榮華や富貴の象徴であり、吉祥性の込められた作品であることが分かります。

当館では他に梅逸が嘉永4年（1851）、古希（70歳）の祝いを記念して描かれたと推測される「四季花鳥図」全十五幅を所蔵しています。もともと画巻であったものが後年軸に仕立てられたもので、こちらも縁起の良い品々が描かれた作品です。





④山本梅逸「竹溪煮茶図」1843(天保14)年、紙本墨画、13.2×51.8cm

④も同じく梅逸の作品で、小さな画面に驚くほど精緻な筆づかいで人物や周囲の自然が描かれています。扇で炉の火を煽って湯を沸かす文人と、川の畔で水をくむ童子が楽し気に微笑み合っています。文人の足元には煎茶を入れる茶銚や湯飲みが見えます。竹林の爽やかな空気の中、清らかな小川の水で茶を入れて楽しむという、煎茶の愛好家には理想の境地ともいえる世界を描き出しています。

に梅逸の茶への思いが感じられます。

作品④は、森清次が昭和10年(1935)に、名古屋で文人趣味の道具を扱った美術商の山田百華堂から購入した書類が残ります。清次は茶の湯や書を楽しむ文化人でした。



⑤中林竹溪作「嵐山春晚図」絹本着色、44.3×93.5cm

山は青年期から晩年まで繰り返し描いていた画題です。中でも本作品は樹々や桜の表現に丹念な筆致が見られる優品です。この作品には、昭和13年(1938)4月、「尾張名家展覧会」に出品のため森林兵衛から徳川美術館に貸し出されたことが分かる資料が付随します。徳川家をはじめ尾張の名だたる名家の人々とともに出品目録に名を連ねることは、大変な名誉であったことでしょう。

⑤は先の作品①と同じく『竹翁金婚祝賀会図録』第四席で展示された掛軸の「竹溪設色嵐山春景」であると思われま



⑥中林竹溪作「青緑松下幽居図」絹本着色  
101.5×33.8cm

⑥の作品には「竹谿林成業」と落款があり、二〇代の頃の作品であることが分かります。円熟期であった父竹洞の山水画を学んでいた時期であると思われるます。松や瀧により湧き上がるような山の垂直性を強調する構図で、緑青を主とした抑えた色調が全体を穏やかな雰囲気にとめています。瀧と山を望む場所に庵があり、俗世間から離れた文人の理想郷が絵画化されています。



⑦山本梅荘「竹蘭画賛」紙本墨画  
大正2年(1913)

山本梅荘(1846~1921)は、現在の碧南市に生まれ、書画骨董を商う家に養子に入って半田に移りました。京都に出て漢籍や文人画を学び、やがて数々の絵画展に出品して評価を得ました。南画(江戸時代末期、中国の明・元の絵画に学んだ画派)を代表する画家として文部省美術展覧会の審査員を務め、長男の石叟をはじめ梅荘の画風に学ぶ画家を尾張の地に多く輩出しました。当館でも岩田心斎など梅荘に連なる南画家の作品を所蔵しています。作品⑦は文人に好まれた竹や蘭、靈芝といった題材が描かれます。

※本稿執筆にあたり、森克彦氏にご教示をいただきました。記して謝意を表します。

(学芸員 杉山章子)



## 新収蔵資料紹介 織物工場資料

令和4年(2022)、博物館は、一宮市木曾川町玉ノ井で長年織物業を営み、後に金属加工工業に転じた旧家より、織物業経営に関する文書などの寄贈を受けた。



工場 南棟 (北面及び西面) 令和4年12月18日撮影

本稿では、文献や受贈資料の一部から整理した工場の沿革を記すとともに、受贈資料の内2点を紹介する。なお紹介した資料は、令和6年1月5日(金)から2月25日(日)までの期間、特集展示「織物工場の世界」にて展示予定である。



工場 南棟 内部 令和4年12月18日撮影

工場の歴史は明治期に遡る。工場は当時、「玉與織工場」などと称した。所在の葉栗郡玉ノ井村と経営者光崎與八の名に因ったのである。創業年は、明治13年・14年・28年などの記録がありはつきりしない。明治・大正期の製品は、確認できた各年の統計資料や民間調査の刊

行物によると、木綿<sup>もめんがすり</sup>絣<sup>がすり</sup>(明治33〜35・37・39)、紺<sup>こん</sup>絣<sup>がすり</sup>(同42〜大正3年頃)、琉球<sup>りゅうきゅう</sup>絣<sup>がすり</sup>(琉球・琉球絣・絹綿琉球)(明治44〜大正6年頃)などあり、絣織物が生産されていた。



工場 南棟・事務所・北棟 (南面及び東面) 昭和26年6月撮影 個人蔵

絣は、布地に柄を表す技法の一種で、染め分けた絣糸と地糸を製織すること

で布地に絣文様を表した。琉球絣は、『愛知県産業案内』(大正8年)の「絹琉球絣」の項に、奄美特産の本場大島紬の「代用品たるへき」製品で「染色は本場の如き植物性

を使用せずして主に人造染料を以て其の色彩を現はす」(ルビは引用者が補記)とある。本場物に比べ頗る廉価なため、顧客の歓迎を受けたという。愛知県内での絣織物の生産は、県北西部の葉栗郡と佐々<sup>ささ</sup>絣<sup>がすり</sup>で知られる名古屋市中心であった。大正期から昭和初期、愛知県内の木綿絣や絹綿<sup>こんめん</sup>交織<sup>こうし</sup>絣<sup>がすり</sup>の生産は、概ね葉栗郡が生産額の首位を占めた(各年の愛知県統計書)。葉栗郡での絣織物の生産は、明治初頭の玉ノ井村に始まる。明治4年(1871)に同村墨仙助が絹絣を織り出したとも、同7年に同村紺屋業墨某が

紀州の織工を雇い入れて木綿絣を始めたともある。その後、絣の生産は、同郡黒田村(現、一宮市木曾川町黒田)・中島郡奥村(現、一宮市奥町)などに伝播し、明治35年頃には葉栗・中島両郡の絣製造業者は80戸にも及んだという。玉與織工場は、玉ノ井周辺に群立した絣工場の一つだったのであろう。



工場 北棟 (現、エキノコ玉ノ井) 内部 令和4年11月10日撮影

その後、工場は中島郡起町三條(現、一宮市三条)で織物業を営む合名会社渡彦商店(現、渡彦毛織合資会社)の分工場となる。昭和11年(1936)調査の『愛知県工場総覧』には、

主要事業は「毛織物及毛交織物製造業」、生産品目は「洋服用サージ」とあり、服地を製織する毛織物業に転換している。織機もその頃、絣時代の手織機から力織機に転換したのか、昭和10年5月に碧海郡榑尾町(現、碧南市)の平岩鉄工所から「毛織力織機」(箆巾92吋)10台が工場に送られている(平岩鉄工所送状)。作成時期不明の機械一覧には、「平岩式織機 4巾直結 22台」とあるので、織機はその後22台まで増やされたようだ。この工場が織物業から撤退したのは二クソンショック(昭和46年)の頃と聞かすが、昭和後期の生産設備は、現時点で織物業時代の工場に関わっていた方が見つかっていないので不明である。ただ操業時



の工場に出入りしていた方に話を聞くと、織機は20台ぐらいはあったそうなので、それぐらいの規模で操業を続けていたのであろう。その後、工場は平成17年(2005)まで、深絞り加工で電池管をつくる金属加工業の工場として使用されたという。

工場建物は鋸屋根工場で、名古屋鉄道尾西線・玉ノ井駅の西側に隣接する。南棟は令和5年(2023)に取り壊し予定だが、その北側の事務所と北棟は現存する。北棟は令和3年、北から2番目と3番目の連の東面(駅ホーム側)壁が壊され、小屋組を含め建物内部がホームから透けて見えるよう「スケルトン」化の改修がされた。外壁の老朽化を契機とした取り組みであるが、これを機に内部は「エキノコ玉ノ井」の名称でイベント会場として貸し出されるようになった。使われなくなった鋸屋根工場の活用例として注目に値する。

#### 参考文献

名古屋税務監督局編『管内織物解説』(名古屋税務監督局、1910年)、愛知県編『愛知県産業案内』(愛知県、1919年)、高間謙之助編『尾州織物業案内』(尾州織物同業組合、1928年)、白木一平編『奥町誌』(奥町教育会、1936年)、愛知県編『昭和十一年十二月末日現在 愛知県工場総覧』(愛知県、1937年)、森徳一郎編『尾西織物史』(尾西織物同業組合、1939年)、その他各年の愛知県勸業年報、愛知県統計書、工場通覧、商工名鑑、大正宝鑑、紡織要覧

#### 【資料①】 縞出入帳

長帳綴じの冊子で、表紙は傷みが多いが、「縞出入帳」、「明治卅六年」などと読める。本資料には紺地を中心に多様な縞、格子、緋などの端布が貼り付けられている。

端布の多くには番号が付され、一部の端布の横には「追加柄」や「中止」などと記される。この帳面で取り扱う柄を管理、もしくはは指示していたものとみられる。



資料① 37.0 cm× 14.0 cm× 4.3cm 明治 36 年 (1903) 館蔵  
「蜻蛉の追加柄一、二、四、五、六、七、八、十、十一、十二、十三、三十」とある。

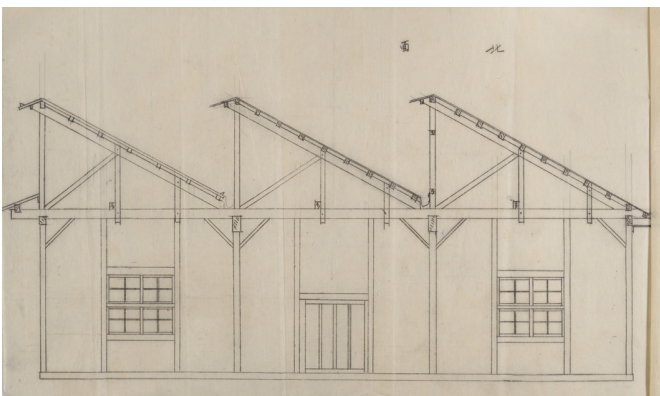
#### 【資料②】 光興工場増築設計書

工場南棟の設計書で、写真は添付された断面図である。工場名の「光興」は「光崎興八」に因る。

工場建物の変遷は、受贈資料の建物一覧表や備忘録などに拠ると、記録上、昭和9年(1934)3月に北棟(4連)が建てられ、同10年10月または12年9月に南棟(3連)が建てられたとある。ただし現存建物が当時の建物かどうかは確認されていない。前述した昭和10年5月の力織機10台の搬入は、工場建築に合わせた動きのように取れるが、何らかの事情によるものか若干時期が合わない。

なお工場には、織機のほか、製織の前工程で使用する製織準備機(ワインダー・管巻機・整経機)が設置されたようだ。

(学芸員 岩井章真)



資料② 断面図 24.7 cm× 18.0 cm 昭和 10 年 (1935) ~ 12 年頃 館蔵

**展覧会・催し物**

所蔵品による企画展  
川合玉堂 四季を描く

4月22日(土)～5月28日(日)

所蔵品による企画展

くらしの道具 妖怪ぞろぞろ

7月8日(土)～8月13日(日)

催し物

博物館で夏祭り!

7月8日(土)～8月31日(木)

連続講演会

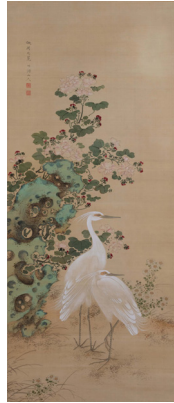
尾張平野を語る27 一宮の発掘調査

7・8月中

企画展

尾張の文人画 森コレクションを中心に

10月14日(土)～11月26日(日)



中林竹洞  
〈秋汀白鷺図〉

企画展

いちのみやアートアニュアル2023

12月2日(土)～12月17日(日)

所蔵品による企画展

版画芸術 棟方志功を中心に

令和6年2月24日(土)～3月24日(日)

民俗芸能公演

2・3月

**特集展示コーナー**

墨コレクション 陣羽織と武家の家紋

4月11日(火)～6月25日(日)

どきどきフレンズとその出身地

6月27日(火)～10月1日(日)

古文書にみる近世の一宮

10月3日(火)～12月27日(水)

織物工場の世界

令和6年1月5日(金)～2月25日(日)

尾張の洋画

小島俊男と芸術大学の画家たち

2月27日(火)～4月14日(日)



小島俊男  
〈人間ピラミッド〉

**たいけんの森・わくわく体験**

企画展「川合玉堂 四季を描く」関連  
釣り竿で鮎つり

4月1日(土)～5月28日(日)

特集展示「ドキドキフレンズとその出身地」関連  
どきどきパズル

6月3日(土)～7月2日(日)

8月15日(火)～10月1日(日)

企画展「くらしの道具」関連  
道具妖怪をつくろう

7月8日(土)～8月13日(日)

企画展「尾張の文人画」関連  
掛け軸をつくろう

10月7日(土)～11月26日(日)

特集展示「織物の世界」関連  
ブレスレットを織ってみよう

12月2日(土)～1月28日(日)

企画展「版画芸術」関連  
五色刷り版画に挑戦

2月3日(土)～3月31日(日)

**博物館キッズクラブ 新規会員の募集!**

学芸員といっしょに博物館に展示してある様々な資料を見て、楽しみながら学びます。

▼対象/小学校3年生～中学生

▼定員/20名(抽選)

▼申込/4月28日(金)までに(定員に満たない場合は随時募集)、「いちのみや子育て支援サイト・アプリ」から申し込み。

**常設展示年間観覧券**

常設展示(特集展示や常設展と同額の企画展を含む)を、ご購入から1年間、何度でもご覧いただけるお得な観覧券です。ぜひご利用ください!



一宮市博物館  
だより

第66号

発行日/令和5年3月31日  
編集・発行/一宮市博物館  
印刷/モリ印刷株式会社  
※過去の博物館だよりは、館 Website でご覧いただけます。

一宮市博物館  
愛知県一宮市大和町妙興寺 2390  
電話 0586-46-3215  
FAX 0586-46-3216  
URL <https://www.icm-jp.com/>